

海外で発掘調査を行うと、食に対する文化の違いを感じさせられることがある。ウズベキスタン・サマルカンド近郊にあるダブシア遺跡を調査した際に食べた羊料理は、食材の準備の過程からして、いろいろ考えさせられるものであった。その羊料理は、共同で調査していた現地研究者の博士取得を祝うため特別に用意されたものであつたが、私たちが彼にご馳走したわけではない。現地の慣例として祝われる側が皆に食事を振る舞ってくれたもので、日本の一般的な感覚とは逆である。

また羊は、日本のように骨と肉にさばいた後のものを購入するようなことはしない。市場で生きた羊を購

みんぱく 食の民族誌

舌

26

入し、調査期間中は村人に預け放牧して太らせてもらい、調査が無事終了した際に屠殺された。いずれは私たちに食べられる（あるいは）羊が、発掘現場のすぐそばの放牧地でのんびり草を食べているのを横目に見ながら、調査を進めていくのも複雑な気持ちになる。

それは一見残酷のように見えるが、ほある際には、日の出とともに村はずれの特別な場所に羊を連れて行き、祈りを捧げ簡単な儀礼

ウズベキスタンの「羊料理」

寺村 裕史



羊の頭をゆで、表面の毛をむじって料理の準備をするウズベキスタンの人々。その後、味付けをして煮込む（筆者提供）

羊肉を野菜と一緒に煮込んだ料理「ティムラマ」。日本語で煮込み物を意味する

朝日の中、命いただく儀式

の後に首を切るという、動物の命をいたぐることに対

する感謝の念は忘れない。

内臓から頭部（脳みそ）にいたるまで余すところなく

調理され、もちろん羊毛も別の用途で利用される。

考古学的な発掘調査によ

う。調査の成功と参加者の安全・健康を願う儀式（）の隅に垂らして祈りを捧げた。調査の成功と参加者の安全・健康を願う儀式

で、日本の発掘調査では、まず目にする事はない光景である。そして、供犠にした鶏は、後で調理し皆で少しづつ分け合つて食した。

考古学的な発掘調査によ

う。調査期間中に現地の村で暮らす限りは、その

土地特有の慣習やしきたり

といつた現在の文化を無視することはできない。考古学者として過去の遺構・遺物を観察する「目」だけではなく、現地社会の今を知るために「舌」も養う必要があるのでは、と感じた瞬間

中央アジアは、シルクロードを通じた人と物の活発な交流によって人類史・文明史における重要な発展がなされた舞台であり、また農耕社会と牧畜社会の境界線上にあるともいえるだろう。現代のスーパーできれいにパックされた肉を手にとつても、その背後の「生きた動物」までは、なかなか考

えが及ばない。しかしこの調査においては、家畜と共に暮らし、家畜から得られるものを最大限利用すること

で生活を成り立たせている牧畜社会としての文化の侧面を垣間見た気がする。

一方で、調査期間中に現地

の指導者）に依頼し、生きた鶏の首を切り、流れ出た血をトレンチ（発掘調査の隅に垂らして祈りを